

常に自己で考え、挑戦・行動できる場を求めて —外科医のすばらしさ—

町田市民病院

肝胆膵外科部長兼外来化学療法センター長
東京慈恵会医科大学外科学講座 准教授

脇山 茂樹氏 (高校34期)



1982年3月 東京都立川高等学校卒業
1990年3月 山口大学医学部卒業
1990年4月 九州大学医学部消化器・総合外科(第二外科)入局
1996年1月 南カリフォルニア大学(National Institute of Transplantation)
2006年4月 東京慈恵会医科大学外科学講座 助教
2010年7月 東京慈恵会医科大学外科学講座 講師、診療医長
2018年1月 町田市民病院外科 肝胆膵外科部長
2018年5月 東京慈恵会医科大学外科学講座 准教授
現在に至る

立高時代のエピソード

私は現在、外科医という職業に従事しています。立高時代は野球部に所属し野球に明け暮れ、友人にも恵まれ、立高に入ってから心から感じておりました。野球の方は、地方予選最後の打者、おまけに見逃し三振という厳しい現実となり、残念ながら甲子園という舞台には届きませんでした。野球部引退後はさらに楽しく、立高祭や友人との交流の日々は得難いものとなりました。

現在に至る経緯(卒業後の活躍)



立高では野球に打ち込み、将来について考えることも無く、ひたすら何かに挑戦し、喜びも悔しさも含めて心からの感動を求めていました。祖父が小児科医であったこともあり医師を目指そうと決めましたが、担任の先生からは何年計画だといわれたことを思い出します。両親の郷里ということもあり九州大学医学部を目指しましたが、とてとても。予備校では数学者の秋山仁先生から、“大学はどこでもいいから早く社会に出て、医者になってから勝負しなさい”と励まされ、山口大学医学部に入学しました。卒業後、九州大学消化器・総合外科に入局しました。外科医を選択した理由は、外科医の仕事は常に忙しく緊張感や緊迫感のある中で、迅速な決断、繊細さ、人間としてのさわやかさを求められ、患者さんが元気になっていく喜びを直接肌で感じることができると感じたからです。最初の2年間の研修は、尊敬できる諸先輩方と出会い、24時間ほとんど拘束されるいわゆる“軍隊生活”を送りました。この2年間で、自分自身の限界は自分次第で決まる、医者たるものとは何か、外科医としての喜びや誇り、時間管理の重要性などを教えられました。その後、日本初の心停止肝移植、学位取得のための研究生活、米国 Los Angelesへ異種移植留学、離島(吉岐)医療の経験、3500例にもおよぶ手術経験、東京慈恵医大への異動、地域医療での人との関わりなど、いろいろな経験を経て現在があります。近年、外科手術の発展は目覚ましく、患者さんに優しい手術として腹腔鏡手術やロボット手術が導入されています。皆さんの時代にはロボット手術も普通となり、新しい外科医像となるでしょう。もちろん、常に何かを考え、感動を感じられる機会を外科医という職業は与えてくれます。ぜひ皆さんも外科医を目指してみてくださいはいかがでしょうか。



ロボット手術

立高諸君へのメッセージ

立高はスーパーサイエンスハイスクールに指定され、理数科の設置も予定されていると聞いています。昨年からのコロナ禍という状況においては、サイエンスが重要であることを痛感させられました。理論的思考方、すなわちサイエンスを深め、伝統ある立高でより多くの感動を経験し、各分野での日本のリーダーを目指すよう頑張ってください。

最後にぜひ諸君に伝えたいことは、以下の5つです。

- ・常に考え行動することから感動が生まれる。
- ・弱者に寄り添い、多様性を受け入れるために、文学・芸術・語学・経済・科学的教養が重要
- ・社会のシステムについて早くから勉強し、将来の自分の方向性に役立てる。
- ・人との関わりは財産である。
- ・時間は限られていることを強く認識する。



異種移植研究(1997年)
(豚からラットに)

今後の皆さんの頑張りに期待し応援しています。